

# ヒラメ種苗量産試験

## (要 約)

工藤 敏博<sup>\*</sup>・福田 慎作

将来、ヒラメの栽培漁業化を図る為に必要なヒラメ種苗量産技術の開発をめざすと共に、放流試験用の種苗生産試験を実施したのでその概要について述べる。なお、詳細は「昭和60年度放流技術開発事業報告書（日本海ブロックヒラメ班）」のなかで報告した。

### 結果の概要

#### 1 種 苗 生 産

- (1) コンクリート水槽で親魚養成を行なったところ、受精卵は十分得られたが、産卵のピークが遅れる傾向にあった。
- (2) 1～4回次で、全長20～25mmサイズを61,351尾生産した。
- (3) 1回次は配合を早い段階から与えたが、全長10mmから良好に摂餌するのを確認した。
- (4) 2回次では急激な水温低下のためと思われる大量斃死が起ったが、その遠因はワムシの栄養不足にあるのではないかとされた。

#### 2 中 間 育 成

- (1) 種苗生産1、2次の稚魚47,143尾を中間育成して全長100mmサイズ20,033尾を生産し、全数、標識を装着した後、十三湖水戸口に放流した。
- (2) 種苗生産3、4回次の稚魚を中間育成して全長30mmサイズ1,500尾、59mmサイズ1,700尾を車力漁港に放流し、また全長31～71mmサイズ約4,000尾を試験用に用いた。

#### 3 体 色 異 常

- (1) 有眼側の体色異常は飼育日数に従って回復する傾向にあり、最初に頭部から回復するよう思われた。
- (2) 無眼側の体色異常は飼育日数に従って回復する傾向にあり、放流時にはほとんどがすべての個体に何らかの色素の出現が見られた。また、無眼側では尾柄部の上下に黒い色素がつくタイプが高率で見られた。
- (3) 体色異常魚（白化魚）と正常魚の大型ヒラメによる共喰い試験を実施したが、正常魚の方が多く捕食された。

---

\* 現水産部漁業振興課